

短歌で紡ぐ

架空の恋

vol2. 第21首～40首

麗 + 優

はじめに・前回までのあらすじ

美紅と清史が短歌を交わしながら恋に落ちていく…。

これは、ブログ「[短歌で紡ぐ架空の恋](#)」から生まれた恋の物語です。

短歌を交換していくうちに、ふたりの間に恋の感情が芽生えていく様子を描いています。

みなさんが恋の物語に引き込まれていくような、そんな歌を紡いでいければと思っています。

短歌に興味をもった美紅と清史は、短歌の会で出会います。

そして、ふたりはメールで短歌のやりとりをするようになります。

はじめは、短歌を練習するためのやりとりだったはずが…。

次第に恋という想いに形を変えていきます。

互いの想いを短歌に詠んだり、過去の告白をしたりもします。

じれったいほど、緩やかに美紅と清史はふたりの距離を縮めていくのです。

ようやく、ふたりは週末に桜を見に行くことになるのですが…。

登場人物の紹介

陶山美紅（とうやまみく）

性別：女性

年齢：42歳

血液型：O型

28歳のときに、夫が不慮の死で他界してしまう。

夫が亡くなった後も再婚することもなく、独り身のまま過ごしていた。

ようやく夫との気持ちも整理がついたと思っていたときに衝撃の出逢いをしてしまう。

死んだ夫に面差しの似た若者・清史に出逢ってしまうのだ…。

太田清史（おおたせいじ）

性別：男性

年齢：27歳

血液型：AB型

会社に勤める普通のサラリーマンであるが、文学が好きなことが高じて、短歌の世界にハマってしまう。

短歌を学ぶために短歌の会に参加したところ、そこで運命的な出逢いをしてしまう。

一目惚れをしてしまった相手は15歳年上の未亡人であったのだ…。

第二十一首 清史の短歌

美紅さま

ようやく美紅さんと一緒に桜を見ることができるんですね。

「天翔ける 桜のきみが舞い降りて 満ちる花びら留めてくれる」

美紅さんがここにいてくれて良かったです。

桜のきみのように儚く消えてしまうのではないかと心配で…。

思わず、大きな声で美紅さんのことを呼んでしまいました。


清史

清史の短歌の説明

天翔けるあなたは桜のきみなのではないですか。

桜のきみが舞い降りたのであれば…。

きっと満開の桜も散らずにその姿を見せてくれますよ。



天翔ける
桜のきみが舞い降りて
満ちる花びら留めてくれる

第二十一首 清史の短歌

第二十二首 美紅の短歌

清史さま

清史さん、私もお花見のことをよく思い出しています。

私が人とぶつかりそうになった時のこと、覚えていますか？

「からだごと盾なる君に守られて想い深める雑踏のなか」

清史さんの優しさを感じた瞬間でした。

美紅



美紅の短歌の説明

ずっと独りで頑張ってきた私でした。

男の人に守られる、これだけのことがこんなに心安らかに感じるなんて。

あなたに想いが深まりました。

第二十三首 清史の短歌

美紅さま

以前、「白い肌」と詠ったのを覚えていますか？

美紅さんとお花見をしていると、あの歌を思い出してしまいます。

少し頬が薄紅色になっていたと思ったのは僕の気のせいですか？

「夢にみた 桜と君と薄紅と 今ここにある すべてが嬉しい」

美紅さんをかばったこと、気づいてくれてたんですね。

清史

清史の短歌の説明

あのとき夢にみたお花見が実現しているんですね。

目の前に桜も美紅さんもいるなんて…。

僕はうれしいです。

心なしか美紅さんの頬が薄紅色になってますか？

第二十四首 美紅の短歌

清史さま

その歌はよく覚えています。

清史さんの大胆さと一緒に。

紅くなったのは気のせいではありません。


「花終わり 実る喜び 我かさね 君との縁(えにし)確かに感じて」

また、お花見したいです。

美紅

美紅の短歌の説明

花が実を結ぶように、あなたとのご縁も確かに結ばれているのですね。



花終わり
実る喜び 我かさね
君との縁
確かに感じて

第二十四首 美紅の短歌

第二十五首 清史の短歌

美紅さま

念願が叶ったので舞い上がってしまいました。

来年も一緒にお花見しましょう。

すでに想いは来年に向かっていきます。

「花終わり つづく未来に想い馳せ 我的心は今も桜舞う」

ご主人さんのこと話してくださってありがとうございます。

まだ…忘れられないのですか？

清史

清史の短歌の説明

お花見は終わってしまいましたが、
すでに来年のお花見のことに想いを馳せてしまいます。
どうやら僕の心の中は今も桜が満開のようです。

第二十六首 美紅の短歌

清史さま

あなたから「未来」という言葉を聞いて嬉しかったです。

夫を失った胸の寂しさは、今ではあなたの優しさで埋められています。

「懐かしきひとへの想いは思い出に 清(さや)けしひとに満たされるいま」

美紅

美紅の短歌の説明

夫への想いは思い出に。

今は清々しいまでの清史さんのことで胸がいっぱいです。

第二十七首 清史の短歌

美紅さま

僕の優しさだったら、いくらでも使ってください。

それで、美紅さんの寂しさが紛れるのなら…。

「懐かしきひとの想いを引き継いで 美しきひとを受け入れるいま」

良かったら、今度は美紅さんの好きな紫陽花を一緒に見に行きませんか？

清史

清史の短歌の説明

ご主人の想いを引き継いで、
今、美紅さんをご主人さんから引き受けたような気持ちです。



第二十八首 美紅の短歌

清史さま

紫陽花ですか？ 嬉しい。

私が好きだと話したこと、覚えていてくれたんですね？

待ち遠しいです。

「またひとつ花の思い出つみかさね 胸の頁にあなたうつして」

美紅

美紅の短歌の説明

あなたと季節の花巡り。

美しい花の景色と一緒に、私の心にはまたあなたが納まります。

第二十九首 清史の短歌

美紅さま

ありがとうございます。

では、ふたつ目の花を見に行きましょうか。

「思い出をひとつふたと積み重ね 胸の頁に花またひとつ」

ご主人さんとの思い出の紫陽花を一緒に見に行きたいと言ったら、

美紅さんはどう思いますか？

清史

清史の短歌の説明

僕たちの思い出がひとつ、またひとつと積み重なると…。
胸の頁に花の思い出がまたひとつ増えるのですね

第三十首 美紅の短歌

清史さま

新しい思い出もこうやって重ねていくうち、大事な思い出になるのですね。

それは人も同じことだと思うのです。

思い出にどちらが特別ということもありません。

夫は夫、あなたはあなた。どちらも大事。

「新しい一歩踏み出すその覚悟 あなたがくれた優しさそえて」

清史さんとなら夫も「いいよ」と言ってくれそうな気がします。

私をご案内しますね。

美紅

美紅の短歌の説明

夫との思い出の場所に別の人と訪れる。それは容易いことではありません。でもいつも支えてくれるあなたとならば、その勇気も持てます。



新しい
一歩踏み出すその覚悟
あなたがくれた
優しさそえて

第三十首 美紅の短歌

作者対談 第三十首までの振り返り

美紅と清史の架空の物語もようやく三十首までできました。
今回は、読者の方に楽しんでいただけるような製作裏話的な
内容の対談をしています。

優 今回もお疲れ様でした。20首以降はスピードダウンしているけど、麗的にはどうかな？きっと、読者的にもヤキモキしてるんじゃないかって思うんだけど…。
(笑)

麗 ようやくここまでって感じだよな！お疲れ様でした。スピードダウンしたのは始めた頃に比べて慎重に詠むようになったからかなあ。慎重になったのはvol.1の反響が想像以上に大きかったからで！(笑)

優 そうそう、本当によろやく30首って感じがするよ。たしかに慎重には詠むようになったよね。あと設定とかを決めたりもあったと思うけど、その辺りも裏話的にお伝えしてもいいんじゃない？(笑)

麗 そうそう、それまで細かいこと何にも決めてなかったからねー(笑) 連日連夜、清史と美紅の性格、生活環境、亡き夫の性格まで考えたりしてね、大変でした(笑)

優 うん、短歌を詠むよりも、設定を細かく考える方がよっぽど大変だった。(笑) それくらい、おおざっぱな設定しか作っていなかったよね。あとストーリーの骨組みを作ったのも20首過ぎてからだよね？(笑)

作者対談 第三十首までの振り返り

麗 そうそう！(笑) 当初の予定は内輪の真面目なお遊びだったからね。ストーリーなんてやり取りしてるうちに展開していけばいいや、くらいに思ってたし。ってもしかして私だけ？(笑)

優 いや、麗と同じこと考えていたよ。たぶん反響が薄ければ細かい設定考えずにそのまま詠み続けたんじゃないかなあ。(笑)でも、読んでくださったみなさんの感想を見ていたら、これではイカンとなったんだよね。(笑)

麗 良かった(笑) 私だけが遊びだったらどうしようかと思った(爆) そうね、皆さんの期待に応えるべく、二人には幾つもの苦悩を被ってもらうことになったよね(笑)

優 あはは。そうそう、幾つもの苦悩がこれから出てくるんだよね。(笑)それは読んでからの楽しみということで…。そろそろお時間なので最後のまとめをお願いします。

麗 はい！ 静かだけど熱い二人に立ちはだかる幾つもの試練、波乱の予感。その時の微妙な心の迷いや揺れを詠んでいければと思っています。この後も楽しみにして下さいね！

第三十一首 清史の短歌

美紅さま

すぐに見たい、すぐに行きたいと気持ちだけが急いてしまいます。

美紅さんと一緒に思い出を作りたいです。

「触れたいとあなたの過去を知りたいともっと触れたいあなたを知りたい」

土曜日に駅で待ち合わせにしましょうか。

晴れでも雨でも楽しいでしょうね。

清史

.....

清史の短歌の説明

触れたくなくなってしまったんです。

美紅さんの過去をもっと知りたい。

だから、旦那さんとの思い出の紫陽花も一緒に見たいのです。

.....



第三十二首 美紅の短歌

清史さま

お仕事は無事に済みましたか？
お休みの日にまで大変ですね。


「ひと目逢いひとり残されひとり旅 ひとり花見てふたりを想う」

紫陽花は今年も変わらず綺麗でした。
隣に清史さんがいないのが寂しかったです…。

美紅

美紅の短歌の説明

やっと逢えたと思ったら行ってしまった貴方。
残された私は思い出の花を思い深く眺めてまわりました。



ひと目逢い

ひとり残されひとり旅

ひとり花見て

ふたりを想う

第三十二首 美紅の短歌

第三十三首 清史の短歌

美紅さま

先日は、急な仕事が入ってしまいごめんなさい。
仕事は無事に終わりましたよ。

「ふたりからひとりになりて君残す 花触れられずが心残り」

ひとりで紫陽花見に行かれたんですね。
美紅さんと一緒に行きたかったのに…悔しいです。

清史

清史の短歌の説明

せっかく会うことができたと思ったのに、
美紅さんひとりを残すことになるなんて…。
紫陽花に触れられなかったこと…。
美紅さんにも触れられなかったことが心残りです。

第三十四首 美紅の短歌

清史さま

清史さんも私と同じ想いと分かって嬉しいです。
別れ際に見た清史さんのすまなそうな顔が忘れられません。
次にお逢いする時は笑顔を見せてくださいね。

「振り向いた瞳の優しさ悔しさが私の奥に沁みてとどまる」

清史さんにお土産があります。
お逢い出来ますか？

美紅

美紅の短歌の説明

振り向いた時の清史さんの目。
私を思いやる優しさと後ろ髪を引かれるような悔しさを見ました。
その目が焼きついて離れません。
早くお逢いしたいと、気持ちばかりが募ります。

第三十五首 清史の短歌

美紅さま

うれしいです。
僕のために、お土産を買ってくれたのですか？

「紫陽花のかすかな軋みの奥底に見え隠れするうつくしき人」

近所に素敵なカフェを見つけました。
週末にランチでもいかがですか？

清史

清史の短歌の説明

紫陽花をひとりで見に行かれたと聞いたときは
僕の心は軋みました。
けれども、あなたのやさしさに触れて、僕のうつくしい
ただひとりの人はあなただと思ったのです。



第三十六首 美紅の短歌

清史さま

もうすぐですね。
お逢いできることを楽しみにしています。

「笑い合う見交わす喜び週末を指折り数えて頬を緩める」

お話したいことがたくさんあります。

美紅

美紅の短歌の説明

清史さんとの笑い合いながらの楽しいひととき。
週末よ、早く来ないかな、と心待ちにしています。

第三十七首 清史の短歌

美紅さま

先日はゆっくりお話できて楽しかったです。
カフェのセレクト大丈夫でしたか？

「あなたとの過ごす時間がいと楽しくすぐ会いたいしすごく会いたい」

帰り際に見たお祭りの広告が気になってます。
美紅さんの浴衣姿…見てみたいです。

清史

清史の短歌の説明

美紅さんと一緒にいる時間、
それが僕にとってはいとおいしいんです。
今日が終わると、またすぐ会いたくなるし、
すごく会いたくなるのです。

第三十八首 美紅の短歌

清史さま

先日はご馳走さまでした。
清史さんがあんなに素敵なお店を知ってらしたなんて…。
たくさんお話もできて嬉しかったです。

「美しい現在(いま)がいちばんこの瞬間(とき)を


あなたに見せたい見ていて欲しくて」

浴衣…恥ずかしいです。
清史さんも一緒に着てくれますか？

美紅

美紅の短歌の説明

清史さんと過ごす時間の流れの中で、現在が私のいちばん輝いて見えるときだと思ふのです。
好きな人には綺麗と思われたい。
清史さんが浴衣姿を望まれるなら…。



美しい現在がいちばん

この瞬間を
あなたに見せたい
見ていて欲しくて

第三十八首 美紅の短歌

第三十九首 清史の短歌

美紅さま

美紅さんのメールをもらって、
外にも関わらず大きな声をだしてしまいました。
それくらいうれしかったんです。

「きみのため吾のためだと言い聞かせはじめての浴衣あつらえてみる」

美紅さんと歩くために浴衣あつらえてみました。
来週が楽しみです。

清史

清史の短歌の説明

美紅さんのためなんて言ってますが、
本当は僕のためなんです。
美紅さんに釣り合う男になりたいから浴衣作ってみました。

第四十首 美紅の短歌

清史さま

清史さん、浴衣とてもお似合いですよ。
せっかくの浴衣だったのに雨が降ってきて慌ててしまいましたね。
でもそのおかげで清史さんに…。

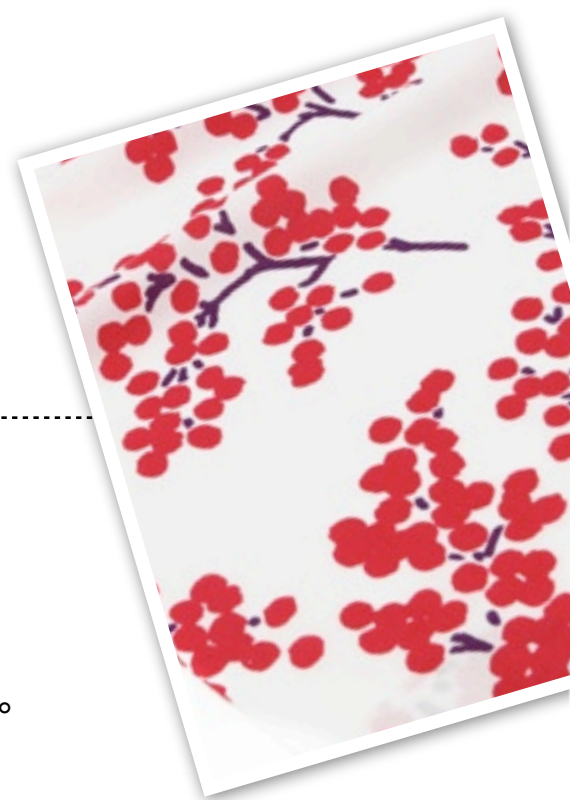
「衣越しつつたわるやさしさ熱帯びてわたしの頬も緋色に染まる」

鼻緒、切れるなんて思いもありませんでした。

美紅

美紅の短歌の説明

まさかあの場で清史さんにお姫様抱っこされるなんて。
力強く温かい腕…。
恥ずかしいのと嬉しいのとで赤面してしまいました。



作者の紹介

ここでは、美紅と清史が主役ですが…。
ほんの少しだけ、作者についても紹介させてくださいね。

麗 (れい)

担当：美紅の短歌
性別：女性
血液型：O型

好きな歌人をひとり：俵万智さん。俵さんの歌は何度読んでもドキッとしたり涙が出そうになります。読むたびにはっとする、そんな歌に憧れます。

好きな清史の短歌：31首目「触れたいとあなたの過去を知りたいともっと触れたいあなたを知りたい」。優しい歌も清史らしくて好きなのですが、気持ちをぶつけるようなこの直球な歌にぐっときました。それなのにこの後逢えなかったなんて！

読書メーター：[レイのページ](#)
読書メーターコミュニティ：《[谷崎潤一郎](#)》

優 (まさ)

担当：清史の短歌
性別：男性
血液型：O型

好きな歌人をひとり：加藤千恵さん。息が詰まるような、呼吸までが伝わってくるような切ない短歌を詠まれるのでそれが好きですね。

好きな美紅の短歌：「ひと目逢いひとり残されひとり旅 ひとり花見てふたりを想う」。どの歌も良いけど、やっぱり切なさが滲むこの短歌がいいですね。孤独が浮かびますよね。

読書メーター：[masaのページ](#)
写真詩サイト：[まほらのまぼろし](#)
カフェサイト：[カフェと珈琲とスイーツがある日常](#)

作者対談 第四十首までの振り返り

美紅と清史の架空の物語もようやく40首までできました。

まだまだ、ふたりの恋の物語がつづきますが…。

まずは、閑話休題的に作者対談でも読んでくださいね。

優 お疲れ様です。いやいや、ここまで辿りつくの長かったね。1～20首までが2ヶ月だったのに、21～40首までは、なんと7ヶ月もかかっていたよ！

麗 7ヶ月も?! かけ過ぎだね! 何をやっていたんでしょう?! (笑)

優 ビックリでしょう? (笑) 最初の20首がいかに流れだけで進めていたかだよ。たしか20首以降は、清史と美紅のキャラ設定を考えて、その後のストーリーの骨組みを考えるのに時間をかけたんだよね?

麗 そうそう、そんなこともあったなあ(遠い目) 今回改めて21首目から通して読んでみたんだけど、清史って情熱的よね。マサくん、やるなあと(笑)

優 あれはしんどかったよね。設定を決めるのが大変だったからね。そうそう、清史はうちなる情熱家にしたかったんだよ。クールと見せかけて、実は…。(笑)

麗 でも楽しくもあったよ♪清史や美紅の住んでそうな物件をネットで探したりしてね(笑) うんうん、実は…のギャップ萌えだよ(笑) 美紅は? どんなイメージなの?

優 ああ、そうだ! どの地域に住んでいるか、どんな家に住んでいるかなんてことを真剣に考えたりしたよね。(笑) そうか、清史の性格はギャップ萌えしちゃうんだね。(笑) 美紅のイメージは、清楚で陰があるけど、意外に大胆って感じかなあ。

麗 忘れてるし!(爆) おおー、美紅は意外に大胆だと思われているんだ?! 大胆にさせてるのは清史のせいでもあるんだけどねえ(笑)

作者対談 第四十首までの振り返り

優 設定考えるのは大変だったという記憶ばかりが残ってるのかもね。あれ、美紅は大胆ではないの？その大胆さも清史のせいなんだ。ということは、夫の前ではまた別の美紅だったのかな？

麗 そうだよ、清史がいつも直球だから美紅も…。夫の前？んー、案外甘えん坊で無邪気な女性だったのかもね。支えてくれる人がいなくなったから、そういう自分を封印してきたのかもしれないねー。清史、頑張れ！（笑）

優 そうか～。清史が美紅を変えていたんだね。年上の女に翻弄される清史と置いていたけど…。案外、逆だったりするのかな？（笑）甘えてた美紅というのも想像できないな。亡くなった旦那さんは、清史とは違うタイプだったんだろうね。

麗 そうそう、当初の設定では美紅が清史をだっただのが、いつの間にか立場逆転！美紅、清史に翻弄されてる！（笑）夫は…(性格の設定してあったっけ？)

優 若い男のエネルギーに翻弄される美紅が、今後どうなっていくか気になるね。（笑）あっ…美紅の夫の性格とか詳細の設定してないね！（それをしないとマズイね。裏で打ち合わせだね（笑））

麗 ああ、清史様、どうか美紅を悪いようにはしないでください！（笑）では夫の設定はこれからの課題として…(笑)

優 あはは、どうだろうね。実は清史は悪い男かもしれないよ。（笑）そうそう、今後の展開もあるから、夫の設定はきちんとしないとだね。では、そろそろ締めに向かわないとね。今後はどうしていきたいとかってある？

麗 えっ？悪い男？！そんな設定？！（笑）えー、40首目でグンと近づいた清史と美紅。ここから二人らしくどう進展させるかが難しくも楽しいところだと思います。どうぞご期待ください！



あとがきとして…。

歌集のvol.1を発行してから、早いもので1年半以上経過してしまいました。短歌はずっと詠むもの、詠み続けられるものと思っていたのですが、うまく詠めるときと、まったく言葉が出てこないときとあるものなのですね。

ブログを読んでもくださっている人がいて、歌集も読んでくださる人がいて、待っている人がいるのではないかと思います、また再開してみることにしました。

まだ、もう少しだけふたりの物語は続きます。

引き続き、ブログ[「短歌で紡ぐ架空の恋」](#)でふたりの恋の展開を追っていかせてください。そして、前巻を読まれていない方は、是非[『歌集vol.1』](#)から読まれることをオススメします。

最後になりましたが、いつも読んでくださる方、待っていてくださるみなさんに感謝の気持ちをこめて…。

麗&優

Copyright © 短歌で紡ぐ架空の恋 Allrights Reserved.

<http://fictitiouslove.blog.fc2.com/>